

近代の陵墓問題と継体天皇陵

高 木 博 志

一

二〇〇一年春からの宮内庁の情報公開により、既報道の「大正天皇実録」など、近代天皇制にかかわる新事実が明らかにになりつつある（『朝日新聞』二〇〇一年三月三十一日付）。陵墓課が所有する、陵墓にかかわる史料も、治定（場所の決定）をめぐる宮内省内部の最終調査である勘注などをふくめて、約二千五百点の公開がなされた。

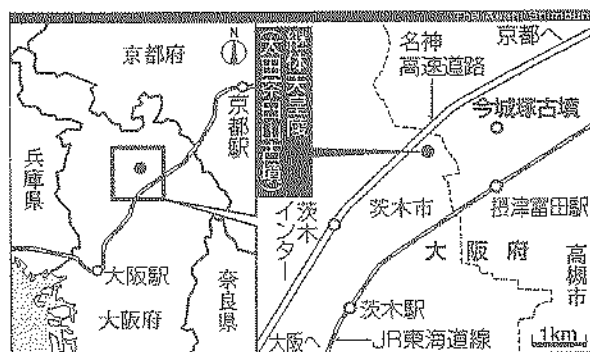
一方、歴史学や考古学会を対象にした陵墓限定公開も二〇〇二年度で二十四回目を迎える。今年は十一月に、大阪府茨木市太田にある継体天皇陵が限定公開された。

継体天皇は、ヤマトの朝廷とは血統の異なる越前からやってきたとされ、筑紫の磐井を鎮圧し百済の五経博士を受け入れた大王である。継体天皇陵（太田茶臼山古墳）は、全長二二六メー

トル、後円部・前方部の高さが二〇メートルの堂々たる南向きの前方後円墳である。ところが戦後の考古学の成果では、現・継体天皇陵は、五世紀代の前方後円墳の典型的類型とされる。継体天皇の没年は『日本書紀』では五三一年であり、むしろ高槻市にある、全長一九〇メートルの今城塚が年代的にふさわしい。発掘調査からも様式的にも六世紀の真の継体天皇陵は今城塚、というのが、今日の考古学・歴史学の声である。しかし今城塚は、現在は陵墓ではなく文化財保護法で定められた史蹟であるが、戦国期の山城築城による荒廃から近代の民有地化による歴史的経緯のなかで、一九八〇年代までは墳丘部に畑が入り込み荒れるがままであった。

さて二〇〇一年度より公開された陵墓課の史料に、一九二九年に宮内省書陵寮考証課の和田軍一が作成した『三島藍野陵「継体陵」真偽弁』（宮内庁書陵部陵墓課、二〇九）がある。和田は、

手前が継体天皇陵。奥に今城塚古墳が見える日本社機から



『朝日新聞』(東京本社版) 2003年1月31日
(掲載許可 2004年2月2日・2月4日付)

東京帝国大学の国史学科を卒業後、考証課に勤務し、このとき三十代はじめ。戦後には正倉院事務所長もつとめる。この史料で、和田は、「今城塚を以て継体天皇陵の陵と定めることハ最も当を得たものと信ず」と結論づけ、元禄期以来の説を明治政府が追認した現・継体天皇陵の治定、を否定する。

歴史的に継体天皇陵をおつてみたい。継体天皇陵は、元禄九年（一六九六）の松下見林『前王廟陵記』^{ぜんわうらうりやうき}で、はじめて太田茶臼山古墳とする見解が示される。そして幕府が主導する元禄の修陵事業を通じて、墳丘に長さ約五メートルの周垣が部分的にめぐらされ、享保十七年（一七三二）までには、治定される。しかし従来からの百姓六人による、墳丘の田や藪の利用は、周垣の外側でかわらなかった。また周濠の水も村々で利用された。

こうした継体陵のあり方は、幕末以降、地域社会から隔絶したもののへと変化してゆく。元治元年（一八六四）には、拝所や鳥居と灯籠二基が建設されて神道の空間に生まれ変わり、一八八四年（明治十七）に御陵地が宮内省の管轄となる。憲法発布後の一八九一年には石欄・鉄扉、駿標が設置され、その後、兆域拡張として周辺の土地が買収されてゆく（後出）。人皇第二十六代継体天皇 三島焦野陵誌 三島部^{（一）}『陵墓沿革伝説調書』宮内庁書陵部陵墓課、一三四三、参照^{（二）}。

神話上の神武天皇から孝明天皇に至るすべての天皇陵

は、一八八九年の帝国憲法発布に合わせて確定される。背景には、国際社会に対して、歴史の古き、「国体の精華」を発揚する、伊藤博文の文化戦略がある。

是れより先、条約改正の議起るに際し、伯爵伊藤博文以為らく、万世一系の皇統を奉戴する帝國にして、歴代山陵の所在の未だ明かならざるものあるが如きは、外交上信を列國に失ふの甚しきものなれば、速かに之を檢覈し、以て國体の精華を中外に発揚せざるべからずと、廟議亦之れを可とす（『明治天皇紀』一八八九年六月九日条）

継体陵ほかの多くの墳丘の形状がたしかな陵墓は、すでに江戸後期から明治初年までに治定済みであったが、このとき根拠があやふやな陵墓群が無理矢理、治定される^{（三）}。これも公開された史料で明らかになったが、担当の諸陵助足立正声は、二条天皇陵について「古墳らしきものも無之」、神武皇后陵は「藥陵ノ思食ニ而決セラルベクヤ」、と苦衷を吐露する（『顯宗天皇外十二方御陵御治定の際、足立諸陵助より其意見を陳せられたる書類』、宮内庁書陵部陵墓課所藏、六四六、参考資料として論文の最後に付す）。

今日、天武・持統合葬陵と天智天皇陵をのぞいて、古代の天皇陵で被葬者が一致するものはほとんどないとされる背景には、こうした十九世紀の文献考証の限界がある^{（四）}。

さて継体天皇陵＝太田茶臼山説には、問題があった。古代の天皇陵の実態を示す、十世紀の『延喜式』諸陵寮には、継体天皇陵は島上郡にあることが明記されるが、太田茶臼山は島下郡にあるためである。本居宣長は、郡の記載の誤記、あるいは郡界が移動したとの苦しい説をたてている。これに対して、太田茶臼山説を批判し、今城塚説を有力にしたのが、旧制茨木中学校の地歴科教諭、天坊幸彦である。一九二六年の『歴史地理』（第四七巻第五号）誌上で、天坊は、自ら発見した「撰津総持寺々領散在田畠目録」にもとづき古代の条里を復元し、八世紀初頭に引かれた島上・島下郡の境界によると、太田茶臼山古墳は島下郡にあり続けたことを論証する。かくして宮内省考証課の和田軍一は、在野の天坊説を発展させ、条里の広さや基本地点（一里区）などの綿密な考証をへて、真の継体天皇陵は今城塚であるとの先の結論に至るのである。

一八八一年、鎌倉時代の盗掘記録である「阿不幾乃山陵記」の発見により、天武・持統陵は見瀬丸山古墳から野口王墓古墳（現・天武・持統陵）に治定替えとなる。このとき宮内省の官吏大沢清臣・大橋長憲は考証のなかで、真の天武・持統陵を指示したのは、誤った古墳に治定されてはおさまりがつかない天皇自身の「ちはひ（霊の威力）」であると論じている（『公文録』三二二、国立公文書館所蔵）。たとえ治定が間違ってい

ても天皇の霊は、その陵墓に「お移りに」なるとする、今日の宮内庁見解との隔たりを感じる。一八八九年に確定されたすべての天皇陵は、たとえ宮内省内部で和田軍一のような学問的な検証がなされても、改められることはなかった。

二

現在、継体天皇陵に治定されている太田茶臼山古墳（茨木市太田）は、一重の周濠をめぐらす南向きの前方後円墳である。全長二二・六メートル、後円部直径一三・五メートル、墳丘の高さは後円部も前方部も二〇メートルである。五世紀代の前方後円墳の主要な一類型である（森田克行「検証・継体天皇陵」『歴史検証、天皇陵』新人物往来社、二〇〇一年）。一九八六年度の宮内庁書陵部陵墓課の調査により、五世紀中期の円筒埴輪の破片約二千点が出土している（都出比呂志「陵墓公開の拡大を望む」『朝日新聞』一九八六年六月十一日夕刊）。

一方、今城塚古墳（高槻市郡家新町）は、真の継体天皇陵とされ、西向きの前方後円墳で、二重の周濠がめぐらされる。全長一九・〇メートル、後円部直径一〇・〇メートルで、後円部の高さが十一・五メートル、前方部十四・五メートルで、『日本書紀』に記された継体天皇の没年、五三一年にあう。また二〇〇〇、

繼体天皇陵の治定の時期については、定説がない。和田軍一の宮内省の内部史料『三島藍野陵真偽弁』(一九二九年八月起草、宮内庁書陵部陵墓課、二〇九)では、細井知慎「諸陵周垣成就記」(元禄十二年)が所在不明との表記でありながら、「島下郡太田村」との地名が明記される矛盾を問題にする。しかし治定の時期の「享保説」や「元禄享保間説」に比して、元禄十二年に繼体陵が治定されたとする方が、より合理的と和田は考える。

一方、宮内庁の内部史料で一九五二年に「繼体天皇三島藍野陵、担任陵墓守部」東野繁が、提出した『陵墓沿革伝説調書』(宮内庁書陵部陵墓課所蔵、一三四三)では、「享保十七年」「一七三二、御治定」となっている。おそらく宮内庁の大阪府三島部の現場では、享保十七年に治定されたとの認識であろう。その根拠となるのが、三嶋村大字太田、斎藤半兵衛方に残る「池之山之由來書」に所載される「口上」である。

口上

一 太田村陵山無年貢地之訳ケ、同敷銀之訳ケ、同川筋敷之訳ケ、右三ヶ条四ヶ村庄屋肝煎、私御書附ヲ以御吟味御尋被為仰付承知仕候、先達而村乃庄屋肝煎共々書附ヲ以申上候通御座候吟味仕候得共申伝斗ニ而書物等モ無御座候

一 陵山之儀古来々無年貢地之儀者御支配御役人様方、能御

存知之儀ニ奉存候、前々々百姓之内六人之名前ニ而取持支配仕来候、先年大阪御奉行所諸國陵御吟味ニ付太田村領宇池山者繼体皇陵ニ相究り候節御支配御代官稻石孫右衛門様、大阪御奉行所兩度も御出被成候、最其節者殿様京都ニ被為遊御座時節ニ而、孫右衛門様陵ニ付度々上京被成、陵山絵図・長絵図等迄御差上山之訳委細被仰上候旨前々々無年貢之儀者上々御役人様方御存知被遊筋と乍惶奉存候、其後度々京大阪御役人様御越被遊、御見分御座候得共、陵山之山上竹垣之外者右六人之者共前々々之通支配仕候、尤も村方ニ而者申伝来候者太田村之用水溜池出来候節、池敷地ニ罷出候、田地主共々右饒山ヲ被為下候と申伝候斗ニ而、何之書物も無御座候陵山之候、右御改以前者宇池山と申来候

一 敷銀之儀、太田四ヶ村庄ニ敷と申ハ少ならて無御座候古年本松林御座候、此持主々例年銀五拾五分ツ、上納仕候村方ニ而者、只今山年貢と申来候敷銀と名付候者、先年田中六左衛門様御支配之節被仰候五拾五分上納銀山年貢と申而者不宣候、依之笹山御勘定所ニ而敷銀と申上納仕候旨承及候、今以書物其記しと申て者無御座候

一 太田村川筋敷之儀堤際ニ田地持之者共堤原ニ竹植、尤只今ニ而者川原ハへ出し所々御座候、併川水之当ニ而者

藪も押流中、畢竟流作之同地御事ニ御座候、先年々川筋所々藪御座候、依之先年々御支配御役人様方能御存知被遊御座候、植候者藪支配仕來候

右三ヶ条、此度御吟味御尋ニ付、乍憚書付ヲ以申上候、右何レ共御役人中様御書付等モ無御座候、右之趣ニ申伝ニ御座候、此上御吟味被仰付候而も申分ケ無御座候、以上

享保十七年子 太田村

組庄屋 七郎兵衛

畑近兵衛門様

中島瀧右衛門様

享保十七年（一七三二）の「口上」から明らかにするのは、「陵山」が無年貢地であり、元禄十二年（一六九九）にめぐらされた三十間（約五五メートル）余の竹垣の外側では、周垣後も六人の百姓が所持し耕作してきたこと。山年貢と名づけられた「藪銀」を領主の「笹山御勘定所」に納めること。太田村の川筋の藪の維持のこと、が確認される。

享保十七年には、京都所司代の松平伊賀守（忠國）が、山陵所在地の調査にともない、山城・大和・丹波・摂河泉に与力・同心を遣わした（和田萃「陵墓の制札」『日本古代の儀礼と祭祀』）

信仰^三 塙書房、一九九五年）。

この文書の成立をもつて継体陵が治定されたと考えるには、根拠が不明瞭であるが、少なくとも元禄の修陵事業から享保期までに所在が決定したと考えるのが妥当と、私は思う。なぜなら、「池之山之由来書」では、つづけて、以下の文書を載せる。

一 継体帝陵之事 松平紀伊守殿知行所「丹波・篠山」

摂州嶋下郡之内

太田村ニ有之候

右者二十四年以前、元禄十一寅年大阪奉行所々嶋上郡三嶋藍野と申田畑之字ニテも有之候ハ、書出し可申旨御尋有之候得共、左様之土地申伝も無之旨申上候

一 右之節紀伊守殿も御吟味有之ニ付、池之山共茶磨山共申候松山有之、廻池形も御座候、所有之段申達候、其後段々御吟味之上ニ而陵ニ相極り、廿三年以前元禄十二卯年、大阪本社御役人御越、右之山上ニ廻り三拾間「約五五メートル」余リ之菱垣被仰付候、其後右菱垣朽損シ候ニ付、五年以前享保二酉年、大阪本社御役人御越シ、如前竹垣被仰候

一 陵山竹藪垣

此仕様、杉栗丸太目通九寸々毫尺廻り、長毫文根入共毫間ニ毫本ツ、立扣木同木長五尺程根入共式間、毫本ツ、

立七八寸廻り加へ、竹本末共筋違ニ切、沓間ニ丸竹ニ而
廿四五本宛之積り内違、押縁三通宛而並ニ同竹ニツ割ニ
して立杭ヲ扣木ニ輪かけつるぎ、右何れもわらひ縄結之
積ニ御座候

一太田村之儀者入組も無御座候、高千十五石五斗七升四合
之村ニ而御座候、已上

丑六月十八日

太田村組庄屋

七郎兵衛 印

同村庄屋

喜左衛門 印

丑六月十八日

同 惣七 印

玉虫佐兵衛様

同村年寄

六郎兵衛 印

同 孫右エ門 印

右之書物、享保六丑年ニ玉虫佐兵衛殿申御役人^前差上候事

ここでは、元禄十二年に、茶臼山古墳に周垣があり、享保
二年（一七一七）にも修理したことが記される。享保六年
（一七三二）段階で、太田村庄屋から宛てられた玉虫佐^左
兵衛とは、京都代官である。なお太田村の領主、篠山藩主・松
平紀伊守信庸は、側用人を経て、元禄十五年四月から正徳四年

九月まで、京都所司代であった（『国史大辞典』吉川弘文
館、一九八三年）。

そして、享保五年（一七二〇）には高札が継体陵に立てられ
る。

此陵之地廻り三拾貳間之内

雜人牛馬等糞ニ入問鋪候

掃除無油断可申付候

依之年貢免許之事

子二月

この高札の裏には、「右御高札ハ文化三寅十二月一日ニ御下
ケニ相成候事」と記される。こうした段階的な修陵事業のゆえ
に、元禄の修陵事業から享保期までに治定されたとおきた
い。

太田村は、元禄から享保期には丹波篠山藩領であったが、維
新期の『旧高田領取調帳』（近藤出版社）では田安藩領分。嘉
永三年十月の『摂津国嶋下郡太田明細書』（『関西大学所蔵茨木
関係史料』三五―一三五、茨木市史編纂室写真版）では、村高
が一〇四一石七斗七升で、太田村の戸数は一二二軒であった。
本郷の太田村は六二軒、枝郷の夙村は二五軒であった。太田全
村の人別は六一二人であった。

さて、本居宣長は、『古事記伝』（『本居宣長全集』第十二巻、

玉穗宮卷)のなかで、「嶋ノ上は、嶋ノ下を写シ誤れるか、但シ安威上下兩郡の界に甚近ければ、此御陵の地は古へは上ノ郡なりしにや、今は下ノ郡なり」とし、「延喜式誤写説」と「郡界移動説」といった苦しい説明をする。

また蒲生君平『山陵志』(文化五年(一八〇八))のなかでは、「三嶋は今割れて上下二郡をなす。上島といい、下島という。藍野陵はすなわちその交にあり、諱くところはこれ下島なり」とし、郡所屬の矛盾については言及は避ける。

文久の修陵の重要な役割を果たす谷森善臣の『蘭笠のしづく』(『勤王文庫』第三編、一九二一年)の紀行では、大和の諸陵をめぐって、吉野から五条、河内長野をへて仁徳天皇の大山陵、大阪、勝尾寺に光明院の陵を訪い、安政四年(一八五七)四月一日に三島藍野陵に至る。

こゝは何村ぞと問へば、おほだ(太田)村に侍りといらふる声ぶり。男大進といふに、いとちかくかよひてきこゆるは、繼体天皇の大御名を地名にかけて畔来れるが訛りながらに伝はりたるにはあらざるか。此村の家並すぎて、行道の左のかたに、茶臼山とも陵ともよぶ古塚は、繼体天皇の三島藍野陵なり。御在所は円く、前は方さまになりて、巳午の方に向ふ。松生ひ茂りて、根廻り三百五十間、御在所の頂発けて、大石五つ顯出たりとぞ。めぐりの堀広く水

湛へたり。北の方東の方に円き小塚五つあり、東北の堀の外側、いま里人の墓地となり、南の堀の外岸には小社立り。こゝより南の広き道に立双べる家どもは風村なり。と、報告している。

谷森善臣の弟子で、維新後は神祇官の諸陵寮から宮内省の御陵掛まで、帝國憲法発布の時期まで修陵事業にかかわる大沢清臣は一八七八年(明治十一)九月に著した『山陵考』(宮内庁書陵部所蔵、一六八函九二号)で、本居宣長から宮内省官吏の大橋長意にいたる、繼体陵に太田茶臼山説を追認する。

また延喜式、扶桑略記にハ島上郡なるよしにしろしたれといま島下郡に属たれハ、その地理古書之趣に合ざるか如くなれと、御陵の東辺すなハち島上郡なれハいさ、か郡界のかはりしものなるへし、また阿威山も阿威川も神名式に載たる阿為神社もミナ遠からぬ地にあなれハ此あたりはそのかミ藍野とよひし地なること明きく、かつ村名の太田も土人の口称にハ太の文字の訓を上声に称ふるなど、おのつから男大進天皇と申奉りし御名にいと近く聞なし奉らるゝハいともあやしきことになむ

その論拠は、第一に本居宣長以来の郡界移動説、第二に阿武山、阿威川等の地名が近くにあり、「藍野」が陵名にかなう。第三に繼体天皇の別名「男大進天皇」は、「太田」に通じるこ

とをあげる。この大沢清臣の『山陵考』が、諸陵寮考証課の和田軍一もいうように、「以て本陵『継体天皇陵』の決定理由書」と、宮内省内部ではなったのである（『三島藍野陵真偽弁』宮内庁書陵部陵墓課、二〇九）。

四

さて、こうした元禄期以来の太田茶臼山Ⅱ継体陵説に最初に疑義を呈したのが、宮社や天皇陵の研究者の木村一郎である。木村は、一九一三年（大正二）一月に「継体天皇陵三島藍野陵に就いて」を『歴史地理』（第二一巻第二号）に投稿し、継体天皇陵は『延喜式』には島土郡に、また式内太田神社は島下郡にあるとする。「右の山陵の西辺と此の太田神社の社殿とは、相距ること僅に五六十間内外なり」とし、郡界の矛盾をつき、継体天皇陵Ⅱ今城塚説を唱える。翌年四月、京都帝国大学文学部の梅原末治は、木村説を「注意に値する」としたうえで、継体天皇陵Ⅱ太田茶臼山古墳としてきたのは、「（一）其の所在地が守戸の転化したるべき夙村なること、（二）そが阿威村に近き故藍野陵なるべし（歴史地理編者の説に依る）等の理由ありしに拠るなるべく、其の労を多とすべきも、然かも未だ今城塚に關する重要な点に注意を払はれざりしは実に遺憾」とする

（『摂津の古墳墓』『考古学雑誌』第四卷第八号）。

木村説をうけて学界に大きく問題提起したのが、喜田貞吉である。一九一三年十二月の「上古の陵墓」（『歴史地理』皇陵、秋季増刊）のなかで、「此の地東西に相對してほゞ同規模の兩瓢形墳あり。東なるは今城塚と稱し二重湫あり、島上郡に屬し、西なるは茶臼山と稱し、單湫を繞らし、島下郡に屬す。兩郡の境界古今變遷あるか。延喜式内島下郡太田神社、茶臼塚の西畔にあり。此の社の位置古より移動なかりしものとすれば、茶臼塚は延喜の頃より既に島下郡の域たりしに近きか」と、木村一郎と同じ論拠で太田茶臼山Ⅱ継体陵説に疑義を唱える。また一九一七年（大正六）三月、「三島地方の古代」（『大阪府史蹟調査委員會報』第四号）では、『延喜式』の郡の記載を問題にし、郡界が移動したなら島下郡の太田神社と太田茶臼山との狭い間隙に元々の境界があつたとの不自然な解釈であるとし、「今城塚は立派に島上郡にある大陵として、継体天皇陵の参考地としても決して恥かしくないもの、あるいはこの方がむしろ理屈に合ったものかとも思われますが、それが今日はあのように、無残にも崩されているのは、いかにも残念であります」と述べる。その喜田説を裏証的に裏づけたのが、旧制茨木尋常中学校の地歴科の教師天坊幸彦である。天坊幸彦は京都の丸太町の出身。父親の怨平は知恩院宮の家臣で、華頂宮博経王、岩倉、姉小路

らに学問を教え、蓮月尼らとも交流し、明治二年には皇学所の御用掛となった。また愨平は、陽成天皇陵・三条天皇茶臼所の陵掌をつとめた。天坊幸彦は一八九七年、東京帝国大学文科大学の国史科を卒業する。一年先輩に喜田貞吉、黒板勝美がいた。文科大学を卒業後、大阪府第四尋常中学校の教諭となり、歴史および修身を講じる。その後、一九二六年には、浪速高等学校の教授となる。天坊は、一九一五年（大正四）大阪府史蹟調査委員会の開設とともに常任委員となり、大阪府の地域史に取り組み、条里、古社寺、上代難波の研究などの分野に取り組み（木村武夫「天坊先生略伝」、天坊幸彦『富田史談』天坊家蔵版、一九五五年）。著書に、『上代浪華の歴史地理的研究』（大八州出版、一九四七年）、『古代の大阪』（湯川弘文社、一九三六年）、『高槻通史』（高槻市、一九五三年）、『三島郡の史蹟と名勝』（一九六一年、天坊裕彦・天坊武彦）があった。

喜田貞吉が自ら紹介文を書き、一九二六年一月の『歴史地理』第四七巻五号に、天坊の「摂津総持寺々領散在田畠目録」が掲載される。喜田が天坊を紹介した背景には、東京帝国大学国史科の先輩・後輩というだけでなく、一九一七年に喜田自身が主張した継体陵に今城塚説を、天坊の議論は裏づけるゆえであらう。天坊が、三島村中城の常称寺に見つけた文和元年（一二三二）の「摂津総持寺々領散在田畠目録」により、藍野

陵が島下郡にあることを論証され、ほぼ現在の茨木市と高槻市の市境が、八世紀初頭に引かれた島上・島下郡の境界であることが明らかとなった。論証のポイントは、条里の復元を通じて、島下郡の一条が島上郡の十一條にあたり、そこに両郡の境界が存在するというものであった。島下郡の一条一里が、島上郡の十一條の何里に当たるかは不明ではあるが、中世の史料を現状の地図の上におとし条里を復元する、画期的なものであった。天坊は三島郡の条里の調査の成果について、

更に其全部を宮内省に提出した。蓋し其調査の結果が旧島上島下二郡の境界を明にすることを得、且つ二郡の旧境界を明にすることが継体天皇三島藍野陵の永年の疑問を解決する絶好の資料となると考へたからである。素より井蛙の管見であるから、当局に取りては何程の参考にもならなかつたであらう。

とする。さらに、「摂津豊能郡の条里」を検討し三島郡からの条里の延長を認めている（『歴史地理』第五二巻五号、一九二八年一月）。また条里の復元を、兵庫県「西摂の条里」でもこころみる（『歴史地理』第五五巻第五号、一九三〇年）。

天坊は、一九三一年の「摂津国三島藍野陵と今城」（『歴史地理』第五四巻第六号）で、享保十七年（一七三二）に太田茶臼山古墳が継体天皇陵に治定されたが、疑義をもたざるをえなく

なり、「其附近にある今城の忽諸「なおざり」に付すべきものに非ざるを知つた。故に大正五年、今城保存のことを府に上申し、昭和二年宮内省へも提議した」とする。そして、太田茶臼山古墳は、継体天皇の元妃日子媛の陵墓とみる（もつとも今日では陵墓が五世紀の築造とされるため年代的にあわない）。

しかし、宮内省当局にとっては、天坊の説は「参考にもならなかつた」わけではない。波紋を投げかけていた。

すでに、天坊幸彦の論文がでた直後の一九二六年五月二十五日、宮内省書陵寮考証課の和田軍一は、宮内省の内部文書の『三島藍野陵問題に就て』（宮内庁書陵部陵墓課、二〇八）を著す。

和田軍一は、一九二三年（大正十二）に東京帝國大学文学部国史学科卒業後、宮内省諸陵寮考証課勤務、戦後の一九四八年には正倉院事務所長となっている（日本歴史学会編『日本史研究者辞典』吉川弘文館、一九九九年）。そのなかで和田は、継体天皇陵が今城塚か太田茶臼山かについて結論をだせずにいる。今城塚説の最大の難点は、塚の位置と陵号との不一致であるとする。「三島藍野陵」の「藍野」は、「安威郷中の藍野の原に負ふ」とし、安威郷に隣接する太田茶臼山がふさわしいことになる。一方、太田茶臼山説では、島下郡にある太田茶臼山は、松下見林などの延喜式誤写論や郡界移動論については、天坊論文によって否定されたと見る。「天坊学士が指摘してをられる

如く、上代条里制実施の郡界と近世の夫れと殆んど一致し、中世以降近世迄の間に郡界移動の事実を証する史料が発見されない」との論拠である。一九二六年段階で和田は、両説、「併存」の見解である。

それに対して、一九二九年八月に草された『三島藍野陵真偽弁』（宮内庁書陵部陵墓課、二〇九）では、「天坊氏の研究の結論には大過なきも、最も重要な研究の過程に於て未だ不十分である。何者三島地方の条里を定めるに就て、条里の広さの基本的数値、及び之を当嵌むべき基本地点の決定に欠けるところがあるからである」と、和田は論じる。それらを検討した上で、継体天皇陵＝今城塚説の最大の難点である、陵名と地名の不一致については、「藍野」とは安威を栽培した土地の意味であり、「安威郷」内に必ずしもある必要がない。そして、太田茶臼山も安威郷の東の外にあり、今城塚が安威郷の「東辺」と考えて差し支えない、とみる。また、大沢清臣らの継体天皇の諱名「男大迹天皇」は、「太田」に通じるとの説についても、「播磨風土記」では紀伊国の「太田」の地名が移されたとされるように、ありふれた地名であるため難点にならない。また円簡埴輪がでたため、継体朝より古いとするのも、太田茶臼山でも同様の出土があるため、適当ではない、と主張する。かくして「結論」として、

總持寺寺領散在田島目錄を中心として三島地方の条里を研究した結果ハ旧島上郡旧島下郡の郡界の一部を決定した。

そして継体天皇の現陵ハ旧島下郡に屬し、今城塚ハ旧島上郡に屬することを明にし得た。この事實を延喜式等に継体天皇陵ハ島上郡に在りと明記されてゐるのに合せれば、今城塚を以て延喜式等に示されてゐる継体天皇の陵と定めて宜いと思ふ。しかも今城塚を継体天皇の陵と定めるに就ての從來の難点ハ多く當を得ないものであり、難点中最も有力なるもの、即ち陵名より見たる今城塚の位置の問題も絶對的なものでなく、固より郡界問題の解決によつて獲たる結果を動揺せしめるものではない。今城塚を以て継体天皇の陵と定めることハ最も當を獲たものと信ず。

と、述べる。しかし、天坊の「参考にもならなかつた」であらうとの憶測とは、全く逆で、陵墓考証課の和田が綿密な分析をおこない、かつ継体天皇陵ハ今城塚説に到達していたのである。しかし宮内省から天坊への連絡がなかつたことからしても、宮内省内部のみの議論に終始したと思われる。宮内省内部では、一定自由な學問的議論がなされていたことが認められる。

五

最後に、これも二〇〇一年度の情報公開によるものだが、継体天皇陵の修補の過程が、江戸期から戦後（一九五〇年）まで跡づけられる「人皇第二十六代継体天皇 三島藍野陵誌 三島部」『陵墓沿革伝説調書』宮内庁書陵部陵墓課、一三四三の「沿革」の年表を史料紹介したい。『陵墓沿革伝説調書』は、山科部・宇治部・神楽岡部・嵯峨部・田邑部・大原部・金原部・畝傍部・佐紀部・忍坂部・傍丘部・掖上部・山辺部・百島部・磯長部・三島部・高野山部の一七部からなり、一九五二年に各部から調書が提出されたものを取りまとめたものである。三島部では勝尾寺の開成皇子墓（光仁天皇皇子）と、継体天皇陵の二つの陵墓のみが管轄されている。

十、沿革

年月日

摘要

享保十七年

御治定

元治元年十月

御拜所及鳥居燈籠二基建設せらる

慶応二年

御在所附近環隄土堤等を修營せらる

明治十七年

御陵地宮内省所管となる

明治十九年

御拜所東側凹凸溝渠多かりしを地を平均し根石垣等修築せらる

明治二十四年三月

御拝所石柵鉄扉を改造、陵標及胸寄建
設、周囲に櫻生垣（かきめもろ）の植附燈籠二基更に
建設せらる

明治三十四年

参道は元村社道と混淆なりしを国道に
接続して陵道を新設せらる

明治四十二年十二月

兆域拡張の為、御拝所西側民有地買
上げ、石垣築造松樹を植附兆域に編入
せらる

大正三年五月

面積拡張の為、御拝所西側の八阪神社
を字高田へ移転料を下附せられ、移転
し、三畝〇九歩を兆域に編入す

大正七年

皇太子殿下「裕仁」御参拝に付、大阪
府に於て御車寄道を新設す

大正十一年二月

御拝所前の田五畝十七歩を買上げ、御
陵地に編入す

大正十四年十一月

御拝所拡張の為、往年買上げの田の埋
立石垣を築造胸寄改造、櫻生垣を補植、
御墮水口附近五十坪浚渫せらる

同年同月

見張所建設せらる

昭和三年四月

見張所附近へ「カシ」植樹

昭和四年四月

土堤上に「カシ」植木職使用にて移植

す

昭和四年六月四日

本多「猶一郎」侍従御参拝せらる

昭和四年十二月

御拝所西側へ松植樹す、御料所周りに

「カシ」種子播く

昭和五年七月十六日

野口「明」侍従御代拝

昭和六年三月十二日

一阡四百年式年祭、立花勅使御参拝

昭和六年八月十四日

秩父宮殿下御参拝遊ばさる

昭和六年八月二十七日

秩父宮妃殿下御参拝せらる

昭和七年十一月十三日

久松「定孝」侍従御代拝せらる

昭和九年九月二十一日

大暴風雨襲来、樹林倒壊折損せり

昭和九年十一月十二日

風害御慰霊の思召に依り諸陵頭拝

礼の儀あり、御山内前方部植栽す

昭和十五年十一月

紀元二阡六百年に際し永積「寅彦」侍

従、御代拝せらる

昭和十六年十月二日

鳥居改修工事着手

同年十二月二十日

同右竣功す

昭和二十五年九月三日

ジョン颱風襲来、樹木倒壊、折

損せり、今時より十一年来絶えてゐた

草刈奉仕人を選び、草刈奉仕仲間規約

を厳守して御陵墓御安泰、御威厳保持

に万遺漏なき様期す

慣例、御臨水下賜灌漑反別

茨木市太田ノ内、高田領十町三反歩

御臨内樋管工事費民費

(亀甲カッコ内は『宮内省省報』により補った)

この史料からは、継体天皇陵が皇室財産として囲い込まれ、荘厳な景観を形成する過程が鮮やかに跡づけられる。

「元治元年十月、御拝所及鳥居燈籠二基建設せらる」との記載より、幕末の修陵事業で、拝所・鳥居・燈籠が設置され神道的空間に生まれ変わったことがわかる(大平聡「天皇陵には鳥居が似合っているか?」岡田精司ほか編『神道を知る本』宝島社、一九九三年、参照)。

書陵部陵墓課の史料である『陵墓の鳥居』(書陵部陵墓課一一四一、「昭和二十五年九月調査係」の奥付がある)によると、その沿革を、

近世修陵の初めである元禄の時はその陵園(大和国の分)を見ると陵域を圍った竹垣の入口を示す門はあるが鳥居はない。享保の修理の絵図にはこの門も見えない。これが幕末の文久・慶応の修補の時に至って燈籠と共に鳥居を設けたのである。これは古制に従ったと共に当時の尊王の気運が先帝の神しづまる貴所をして最も森厳に表象するために用ひたものであらう。

とする。「古制」かどうかは、検討が必要であらうが、幕末の段階になって、一斉に鳥居が設けられた、と宮内庁でも認識されている。

「池之山之由来書」では近世の継体天皇陵の「陵山之山上竹垣之外」は「百姓之内六人之名前ニ面取持支配仕来」とあるが、一八七三年(明治六)では、「塵芥鬱埋」「雜草又ハ小竹繁茂」の状態であった(「継体天皇陵御在所御掃除ノ件」宮内庁書陵部陵墓課一〇八九)。元治から慶応期にかけての拝所の鳥居・燈籠設置や環陸土堤が修営された。この幕末の修陵事業中で、墳丘の農民の土地所有は解消されていたのではないか。

一八七八年には、全国的に御陵地が宮内省の管轄となっているが、継体陵は一八八四年に宮内省所管となる。このズレについては、理由が不明である。

一八八六年十月二日には、太田村の高田に住む、継体陵内の鳥の糞など塵芥を取り除く仕事を請け負った高田在住の者から、守部の斎藤半兵衛にあてて「御断書」がだされ、陸内にみだりに小舟を使用した不始末をわびている(『斎藤修家文書』一一三、茨木市史編纂室所蔵写真版)。かつては高田の所有する堀(陸)がまわりをめぐっていた継体陵は、一八八六年では近づきたいものとなっていたことが理解できる。

立憲制とともにすべての天皇陵が治定されるが、そのあとも

陵墓と兆域を荘厳化する諸施策がとられる。一八九一年には、拜所・石欄・鉄扉を改造し、陵標および駒寄が建設され、周囲に櫻生垣が植附られ燈籠二基が増設される。

また兆域拡大についても、一九〇九年（明治四十二）十二月、兆域拡張のために拜所西側の民有地を買上げ、石垣を築造し松樹を植附けて⁽⁶⁾いる。大正大礼の記念事業と推測されるが、一九一四年（大正三）五月には、拜所「西側の八阪神社を字高田へ移転料を下附せられ移転」となり、三畝〇九歩を陵墓の兆域に編入する。この八阪神社は、近世には「夙村氏神」とされたものである（安永五年 一七七六「摂州島下郡太田村明細絵図」関西大学図書館蔵、『絵図に描かれた被差別民』大坂人権博物館、二〇〇一年）。

陵墓兆域の荘厳な景観に向けて、昭和大礼の時期の一九二八、二九年と、「見張所」「土堤上」「御料所周り」に常緑の「カシ」が植樹される。「カシ」の植樹は明治神宮造営時に確立する、神苑設計をはじめとする近代造園学の問題にかかわるであろう（青井哲人『神社造営よりみた日本植民地の環境変容に関する研究―台湾・朝鮮を事例として』京都大学博士学位論文、二〇〇〇年）。陵墓の景観整備と造園学については未解明の課題である。

〔註〕

(1) 高木博志「陵墓の近代」（篠原徹編『近代日本の他者像と自画像』柏書房、二〇〇一年）、同「近代天皇制と古代文化」（『岩波講座 天皇と王権を考える』五、岩波書店、二〇〇二年）。

さて、一八八〇年に宮内省御陵墓録の最初の『陵墓一覽』があるので

惣計四百六拾貳箇所

此表掲載スル所ハ、明治十三年四月以前ノ確定ニ係ルモノニシテ、未タ其数ヲ尽ストセス、抑歳月ノ久シキ埋埋ニ属スルモノ実ニ多ク、則帝陵ト雖モ、顕宗天皇、武烈天皇、光孝天皇、村上天皇、冷泉院天皇、円融院天皇、三条院天皇、後一条院天皇、二条院天皇、安徳天皇、順徳院天皇、仲恭天皇、光明院天皇、十三代ニ至テハ、未タ其所在ノ確証ヲ得ス、況ヤ皇后以下ノ陵墓ニ於テヲヤ、猶更索考覈ノ力ヲ尽シ得ルニ随テ、之ヲ掲ケ以テ他日全備ノ功ヲ期セントス

とある。ここで一八八〇年代に最後まで治定されなかった不明の天皇陵には、古代奈良の顕宗天皇、武烈天皇を除いて、光孝天皇から光明院天皇に至るまで、平安京で火葬された天皇が多いことに注目したい（大石雅章「平安期における陵墓の変遷」都出比呂志編『日本古代葬制の考古学的研究』大阪大学文学部考古学研究室、一九九〇年、山田邦和「平安京の葬送地」『季刊考古学』第四九号、一九九四年）。

(2) 明治期の陵墓治定については、先駆的な研究として、今井莞「明治以降陵墓決定の事態と特質」（『歴史評論』三二二号、一九七七年）があり、その後、茂木雅博『天皇陵の研究』（同成社、一九九〇年）、外池昇『幕末・明治期の陵墓』（吉川弘文

館、一九九七年）などがでてきている。

- (3) 『池之山之由來書』は、大阪府三嶋郡三嶋村大字太田、当時村長齊藤半兵衛所蔵の文書を一九二四年（大正十三年）二月十四日に、宮内省の陵墓守長西野伊之助が謄写したものである（『三島藍野陵・開成王墓 沿革 大正十二年調査 三島郡』宮内庁書陵部所蔵、陵函九七九号）。この他に、陵墓課に一九二六年に写された同文書がある（二二二）。篠田皇民『自治治沿革史、昭和風土記』（東京都新聞社、一九三一年）の「自治治沿革、齊藤半兵衛、三島郡三嶋村太田」の項目には、「君の祖父半兵衛君〔父子は同名〕は、曾て久しく戸長を勤め、又御陵の守部に奉仕す、大正十二年の関東大震災當時に、継体天皇御陵に關する記録焼失せるが、君の家の文書によりて其等の記録を詳にせしため、内閣統計局は感謝状を送り來した」とある。現在、齊藤家では「池之山之由來書」の原本が行方不明である。

- (4) 大沢清臣の履歴は、奈良県『大和人物志』一九〇九年、参照。なお大沢清臣の『山陵考』の継体陵は太田茶臼山古墳説のこの引用部分は、大橋長慈の『自応神天皇、齊明天皇、諸陵要記』（宮内庁書陵部所蔵、一六八函三九〇号）のほとんど引き写してある。

- (5) 木村一郎は三重県人で、一八九八年に奈良県下の教職をなげうって、正木直彦の「同情」を得て、一八九九年三月六日貴族院第十三議會に「御歴世宮址保表ノ建議案」を提出する立て役者となつた。さらに同年、大阪市の仁徳天皇一千五百年祭で高津宮址紀念碑の場所の比定にも貢獻したという（『歴史地理』一卷一號、一八九九年十月、同誌二十卷四號、一九二二年十月）。
- 「御歴世宮址保表ノ建議案」（『帝國議會貴族院議事速記録』一五）の抜粋。

御陵墓ニハ概ニ諸陵寮ヲ置カレ保崇修理ノ職掌アルモ、御宮庭ニハ未タ其掌ナク、全數五十三箇所ノ内、其保表ヲ得タルハ大和國ノ橿原、山城國ノ長岡、平安、河内國ノ樟葉、近江國ノ大津等僅々五箇所ニ過キスシテ、其他ハ概ニ蕪滅船晦シ國民ノ仰慕、歴史ノ考証ニ途ナカラシムルハ我國體上ノ欠典遺憾ノ極ト云サルヲ得ンヤ

一八九九年のすべての天皇陵の治定を受けて、天皇治世を視覚化するものとして「御歴世宮址保表」が位置づけられている。高木前掲「陵墓の近代」および内田和伸「古代遺跡の履歴と風景」『奈良國立文化財研究所學報』第五八冊 一九九九年を参照。

- (6) 『三島藍野陵・開成王墓 沿革 大正十二年調査 三島郡』宮内庁書陵部陵墓課、陵函九七九号）には、「一、明治四十一年二月、大字太田ノ内小字高田氏神社地御買上ケ、此面積三畝三坪」とある。

參考資料

「顯宗天皇外十二方御陵御治定の際、足立諸陵助より其意見を陳せられたる書類」

顯宗天皇陵
武烈天皇陵
光孝天皇陵
村上天皇陵
冷泉院天皇陵
円融院天皇陵
三条院天皇陵

後一条院天皇陵

二条院天皇陵

安徳天皇陵

順徳天皇陵

仲恭天皇陵

光明院天皇陵

綏靖天皇陵

崇峻天皇陵

弘文天皇陵

天武天皇陵

持統天皇陵

文武天皇陵

淳仁天皇陵

附言

顯宗

此分ハ御陵墓伝説地と相成居候処、ソハ後門ノ一隅ヲ残シタルマデニ付中間ノ人家ト（此ノ移転ハ少々費用ヲ要スベシ）、南方ノ夷子社ハ取除ケザルベカラズ無拠儀と被存候

武烈

天然山ニ掘テ築キタル陵ナリ（官山や赤禿山）今ハ陵形定カナラズ候へ共、前方後門ニハ違ヒナキ様也、前ノ脇ニ少々池アリ（能ト云、今市ノ古陵ハ午^申ニ見ル十二丁隔テタルベシ、志都美神社ハ卯辰ノ方ニ見下ケラル、二丁許も距テタルカ、

余リ甘心ハセザレトモ、コ、ニ決スルノ外無ルベシ

△ 光幸

△

今少し北寄ナレバ妙ナレトモ致方なし、しかし元禄度已ニ本陵ニ宛テタレバ、今も天皇塚ノ称アリテ心持ハよし

村上

山ヲ天然山ノ頂上ニ築成シタリ、村上山ト云ヒ体裁も天皇サマらしく妙なれども、今少し南ならバと思ふハ学者ノ同感なるべし

冷泉

北ノ塚ハ中々ニよし、大分カギ取リタレトモ、未ダ陵形ヲ失ハズ、

小墓といへる処も見しが、ソハイケズ

円融

此ハいひ分よしなし

先年掘出タル器物ハ何ナリシカ覺エズ

三条

水田中ニ在ル古墳ニ面四方より漸々カギ取リタルナレトモ、流石ニ祟リアリトカ申面数尺ノ形ヲ存し、石も積ミ重ネテアレ、地勢もよし山彼ノ塚^{ゴモクツカ}ノ比ニハアラサルベシ

新 二条

此ハ色々探索候へ共古墳らしきものも無之候へハ無拠、松原村ノ人家寄ニ高燥らしき茶畑ノ一面ヲナセル処ヲ見立置候、

御火葬所ハ、右北山村元神宮寺裏ノ古塚（先年色々ノ宝器ヲ掘得タリト云）可然と相考候へ共、尚外ニ二三ノ古家もアレバ他日ノ

取調ニユヅリ申候

順徳

後鳥羽陵ノ近傍ニ二三ヶ所、タ、ナラズ相考候地アレトモ、矢張北隣ナル、法華堂跡ニ御定候方可然存候、

タトヒ後鳥羽帝と同じ御陵所としてもコ、ナレバ、更ニ差支無之存

来迎院ノ五リン塔ハ見下不被存候

新 仲恭

此ハ無廻鏡ニ付東福寺上ノ宮山ノ塚、頂上ニ見込ヲ相立申候、東寺ヲ眼、京都市中ヲ見、泉涌寺御陵ニ対し、伏見も眼下ニ在テ、実ニ良景之地也、皇嘉門院陵ニハ中間ニ長州土人戦死墓ヲヘダテタリ、コレノミハサトおもしろからざれども

新 光明

崇光陵ノ東ノ方清淨ニ付其方ニ見込相立申候、南ノ崖ノ方ナリ、挿入部ニハ大木もアリテ新規ノ地トハ見え不申候

宮子娘陵

此ハ言分なし 例ノ赤禿山なり

帶子川上陵

砂茶屋ニ対スル所ニ而、小泉辺ハ可ナリ廻リ来レバ、川上ノ名当ラズトセズ、随分大綾なり

明子白河陵

信置ニハ少シ心おちぬ処ニモアレド、先ヅ差支無之様被存候、塚ノ上ニハ松揃もアリテ中ニニヨヤ塚なり

宇治墓

今少し山寄ナレバと思ふまでにて、体裁ニハ云分なし、宇治川ハ南西ニ流レ、近き処ニテハ耆斗なるへし、東ニ浮船ノ古蹟あり、前方ノ正面宇治橋ノ中央ニ向フ(橋ハ丑寅より未申ニ架レリ)コ、ニ決して憾なかるべし

上西門院陵

法金剛院東ニ堂跡ニ面掘出タル墓穴ヲ見ルニ、タダ人ノツカニハ非らず、地方官が上申ノ趣もアレバ、此際御陵と決セラレテ差支然ルヘク被存候

神武皇后陵

コレニハ困リ候へ共、新ニ築陵ノ思食ニ面決セラルベクヤ、或ハ

外ニ良地ヲトシテ修設アラセラルベクヤ、いづれニ而も可然被存候

右御參考迄ニ申上候也

五月十七日

正声

川田殿

右ハ明治二十二年六月一日

願宗天皇外十二方御陵御決定の勅裁を仰ぎ奉り前足立諸陵助より川田諸陵頭へ参考として其意見を陳せられたるものにて候

川田家ニ保存の処、過日嗣子鷹君より拙者方へ送附候ニ付、諸陵寮へ寄指候也

大正十三年九月一日

外崎寛 印

右ハ足立諸陵助自筆にて、其意見の程も窺はれ候ものト 寛又誌すよし

欄外の「新」「△」は、朱筆である。

(補注) 宮内庁書陵部陵墓課所蔵、六四六。これは帝國憲法が發布された一八八九年度に、すべての天皇陵治定に向けての諸陵寮内部における検討資料である。足立正声諸陵助より川田剛諸陵頭に述べた参考意見のメモ書きである。この足立の意見により、以下の十三カ所の陵墓は一八八九年度に治定されたものである(「願宗天皇陵等の治定」『明治天皇紀』一八八九六年六月三日条)。

願宗「奈良県葛下郡今市村願宗天皇傍丘磐坏丘南陵」、武烈「奈良県葛下郡今泉村武烈天皇傍丘磐坏丘北陵」、光孝「京都府葛野郡宇多野村

光孝天皇後田邑陵」、村上「京都府葛野郡宇多野村村上天皇村上陵」、冷泉「京都府愛宕郡鹿ヶ谷町冷泉天皇後本陵」、円融「京都府葛野郡宇多野村円融天皇後村上陵」、三条「京都府葛野郡大北山村三条天皇北山陵」、二条「京都府葛野郡大北山村二条天皇香隆寺陵」、順德「京都府愛宕郡勝林院町順德天皇大原陵」、仲恭「紀伊郡東福寺山上仲恭天皇九条陵」、光明「紀伊郡堀内村光明天皇大光明寺陵」、宇治墓「京都府宇治郡宇治村応神天皇皇子菟道稚郎子宇治墓」、上西門院陵「葛野郡花園村尊称皇后統子内親王上西門院亮」。

一八八九年度に未治定であった四つの陵墓について、『延喜式』諸陵寮(『国史大系』)に、「宮子娘陵」は「佐保山西陵」、平城朝太皇太后藤原氏。在大和国添上郡、「常子川上陵」は「河上陵」、贈皇后藤原氏。在大和国添下郡、「明子白河陵」は、「白河陵」、太皇太后藤原氏。在山城国愛宕郡上栗田郷」と記載される。「神武皇后陵」については、『延喜式』諸陵寮に記載がなく、今日にいたるまで未治定である。

〔附記〕 本稿は『朝日新聞』二〇〇三年一月三十一日付(大阪本社を除く全国配信)の拙稿「疑惑の継体天皇陵、別人説は戦前から」の問題意識を発展させ、史料的に裏づけたものである。執筆に際して、上田長生・吉川邦子・小林丈広・黒岩康博・重岡伸泰・高久嶺之介・服部敬・堀尾正彦諸氏をはじめ多くの方々から、ご教示と史料の提供をうけた。記して感謝したい。

〔補論〕 本稿脱稿後に、外池昇氏の御教示により、「臨時陵墓調査委員会書類及資料」(七冊、宮内庁書陵部陵墓課所蔵七三三)の存在を知った。以下は同史料による。一九三五年六月二十七日、「臨時陵墓調査委員会ニ於ケル宮内大臣挨拶」では、発足する同委員会の目的を、長慶天皇陵およびその他未治定の陵墓の調査におく。委員会の構成は、委

員長に宮内次官大谷正男、委員には宮内省から渡辺信・浅田恵一・芝葛盛、学者では辻善之助・浜田耕作・黒板勝美・荻野仲三郎・原田淑人幹事には諸陵寮考証官和田軍一のほか伊藤武雄・林与之助があたる。

臨時陵墓調査委員会の主要な目的は長慶天皇陵の調査にあるが、諮問第五号(今城塚の陵墓参考地編入問題)の担当委員の浜田耕作・黒板勝美・荻野仲三郎が、天坊幸彦など多くの研究を参考にしながら、一九三六年二月十日に今城塚を陵墓参考地に編入すべきと報告している。しかしこの答申は宮内省では採用されず、戦後に至るのである。

今城塚を「陵墓参考地(編入セラルベキ)」と、浜田ら三委員が答申するポイントとなる郡界問題について、『理由書』では「其郡界特ニ茶臼山附近ニ於ケルモノニ就キテ見ルニ、近時発見セラレタル大阪府三島郡三島村大字中条常称寺所蔵ノ撰津国島下郡総持寺寺領散在田畠目録ヲ始メトシ、撰津国勝尾寺文書其他ノ文書ニ基ク当地方条里ノ研究ノ結果ニ関レバ、此地方ノ条里施行当時ノ郡界ハ茶臼山ノ東ニ在リシモノト推定セラレ、上記延喜式、諸陵雜事注文及ビ扶桑略記ノ記載等ト併セ考フルニ、茶臼山即チ現在ノ三島監野陵ハ島上郡ニ属セシモノトスル能ハザルニ似タリ」と結論づける。なお天坊幸彦は、一九二七年(昭和二)十二月に宮内大臣宛に「三島監野御陵ニ関スル提議」を上申している。その際に「関係資料」として、「撰津国島下郡総持寺々領散在田畠目録」「勝尾寺田畠課状」「石清水文書」「興楽寺文書」の写が提出されている。天坊の「提議」の内容は不明だが、臨時陵墓調査委員会で「天坊幸彦の説」とまとめられたものがある。そこでは、これらの古文書から島上・島下二郡の条里の起点と敷え方を論証して、「二郡の郡界が茶臼山と今城塚の中間にありしことを確めたり乃ち今城塚は旧島上郡に属し茶臼山は旧島下郡に属すと断言せざるを得ず」とある。天坊幸彦の研究が、今城塚を陵墓参考地に編入すべきとの臨時陵墓調査委員会の報告の根拠であったことは明瞭である。